

■『気前のいい金庫くんのお話』が面白い。結末まで読むと、愕然としてしまう。

2008年の晩秋、40歳になったばかりの高野タカシがひさしぶりに生まれ故郷に帰ってみると、駅前の広場がきれいに整備されていて、心なしか、外を歩くお年寄りたちの表情が明るく感じられた。

(中略)

「いまの市長のしさんが連れてきた収入役のGさんが、以前は凄腕の外資系銀行マンだったらしくてね。……伝説のディーラーとかいう人で、奥さんは金髪の外人さんよ。それでね、Gさんが市の基金をうまく増やしてくれて、財政が豊かになったんだって」

「へえ。いまは銀行預金の金利も低いし、株価も下がってるのに、すごいもんだね」

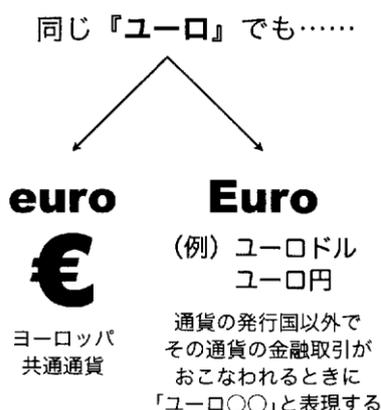
(以下、続く)

■オプション取引の本質は「リスクの押しつけ」。デリバティブ取引は「リスクを濃縮する」。

オプション取引の本質は「リスクの押しつけ」であり、オプションの売り手はリスクを押しつけられる側になるので、そのリスクをいかに計算して評価するかが重要で、だからこそ金融工学が発展したはず……。実際には、そうではなかった。高度化した金融工学を駆使して金融機関がおこなったのは、オプションの売り手になって客のリスクを引き受けることではなく、逆に、たっぷり濃縮されたリスクを表面上は安全そうにみえる金融商品に混ぜて、客に押しつけることだった。金融工学は、現実には「安全偽装技術」として使われたのである。

恐ろしいことに、デリバティブ取引は「リスクを濃縮する」機能を持つ。デリバティブのなかではかなりシンプルな取引の、商品先物やFX（外国通貨についての先物の一種）などが売り物にしているように、少額の資金でその数十倍とか数百倍のリスクがある取引が可能になるからだ。これを「レバレッジ（挺子の原理）を利かせる」とか表現する。スワップやオプションの取引でも、数倍から数十倍、数百倍のレバレッジを利かせて、濃縮したリスクをやりとりすることができる。

■素人には紛らわしい「ユーロ」



仕組債は基本的に、規制が緩い「ユーロ (Euro) 市場」で発行されているが、このユーロ (Euro) は、ヨーロッパの通貨単位のユーロ (euro) とは異なる。後者のユーロが誕生する前からの国際金融用語として、その通貨の発行国以外でその通貨の金融取引がおこなわれるとき——たとえば、アメリカ以外で米ドルの金融取引がおこなわれるときに、これを「ユーロドル」と呼び、日本以外で円の金融取引がおこなわれるときに、これを「ユーロ円」と呼んでいた。

したがって、「ユーロ円債」とは、自由な国際金融市場で発行された円建債券（通貨表示が円の債券）のこと。ヨーロッパの通貨単位のユーロとは関係がない。

■著者のような専門家でも、真剣に考えないと勘違いする金融商品

正直に告白するが、私のような専門家でも、危険性を見抜くまでに何時間も真剣に考えないとわからない金融商品はある。たとえば、2007年春に最初にみせてもらったFXターンの債は、パソコンで簡単なシミュレーションをして、数時間集中して真剣に検討してみるまでは、すごく魅力的にみえた。資料をみてから少なくとも1時間以上は、顧客に有利すぎるから金融機関の条件設定がまちがっているのではないかと思う気持ちのほうが強かった。平均的にみてさほど有利ではないと断言できるようになったのは、翌日以降だった。一般向けの仕組預金でも、しばらく考えないと、有利な金融商品かと勘違いしそうだったものがある。